

まちを記録する

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

まちの目抜き通りにある瀟洒な写真館に入ると、壁一面に「まちの記憶」がよみがえった。

古くからある地元の写真館には50年、いや100年前に撮影された写真が残り、まちの今昔が一目でわかる。自然やまちの変わりゆく姿を悔やみ、昔はこんな風だったのかと懐かしさがこみあげてくることも。それが、単にまちの光景だったり、行事だったり、自然だったり、にぎわう昔の駅舎だったり……

軽井沢の旧軽銀座通り（旧中山道）にある土屋写真店は、まちの風景を百年にわたり撮り続けてきた。旅籠が立ち並ぶ宿場町だった頃の軽井沢、別荘地として外国人ばかりが目立った明治時代、昭和に入ると皇室のロマンスの場、政治家、外国の要人やジョンレノンなどの有名人が数多く訪れたまち。出張撮影に出向きシャッターを押した一枚一枚の写真がにぎやかに飾られている。どれも、話しはしないが軽井沢の歴史をしっかりと伝え継いでいる。幾度となく繰り返される浅間山の噴火、そこに偶然写った集落の様子は往時を伝える貴重な記録となる。

写真店の二代目は、軽井沢と縁のある北原白秋の詩を挿入した版画やイラストを作成した。現三代目になると、それら古い写真や版画を絵葉書にして、分かりやすい説明を添え販売している。絵葉書は、まちの魅力を世界中の人々に伝えるシンプルだが最も有効な手段の一つとなる。

古本市の片隅に、観光地とくに昔の温泉場の絵葉書セットをみつけることができる。当時の美しい景観や風情あるまちの雰囲気がうまく表現され、活気あふれる有り様にたどりつくとき、私たちが失ったものの大きさに気づかされる。まちの魅力を丁寧に記録して伝えていくことは、まちづくりを考える上

の基本姿勢だろう。

カメラのない江戸時代、葛飾北斎や安藤広重が描いた東海道の風景画を思い浮かべる。絵として記録されることで、今を生きる私たちに何の違和感もなく往時の姿が伝わってくる。美しい富士山が力強く描かれているタッチをみると、昔も今も変わらぬアイデンティティの息づかいを感じる。浮世絵のほか、江戸名所図屏風のように、風俗画や景観図として鳥瞰図的に生き生きと描写した屏風スタイルもあった。

写真を撮影することが、写真館の特権や特技でなくなり、個人レベルしかも携帯電話でも可能な時代になると、まちの写真館は人知れず姿を消していった。そうした中、写真や絵葉書をもっとまちづくりに活かそうと、今昔を対比したまちの写真集、ひいては映画の制作まで企画されるようになったのは心強い。閉館を決めた写真館や個人宅に保管されている貴重な写真を寄贈してもらおうとする自治体（たとえば喜多方）の取組もみられるようになった。

土屋写真店三代目の町田晴彦氏は、「軽井沢の行事ばかりでなく、商店街の店舗の移り変わりなど、日常の風景から守り続けたい。写真には、まちの記憶と人々の思い出がいっぱい詰まっている。それを未来の人たちに大切に伝えられる写真館でありたい。」と静かに語ってくれた。

書籍や音楽なら図書館がある、絵や彫刻は美術館に、化石など歴史の証拠品には博物館が用意されている。平成の大合併は、地域史を語る公文書館の安定した存在すらおびやかしている。デジタル社会のいま、時代の生き証人として忘れてはならない生活情景がどんどん失われていく。記録は文化である。

旧軽銀座通り（旧中仙道）今昔



大正二年の土屋写真店前 軽井沢 土屋写真店

大正二年 (1913)



現在の軽井沢・土屋写真店



二十一世紀の旧軽銀座通り (2009) 軽井沢 土屋写真店

平成二十一年 (2009)

(写真提供：土屋写真店)



鞆の浦 (広島県福山市)



(日光国立公園) 塩湧名所 塩湧橋

The Shiwaki Bridge, Shiobara

塩原名所の塩湧橋 (日光国立公園の絵葉書セット)



PORT OF YOKOHAMA

(神奈川県・神奈川県観光協会) 「メリケン波止場の灯がみえる」と唄われた横浜港



FRANKFURT - GESTERN + HEUTE



(Published by Michel+Co.) フランクフルト (ドイツ) の今昔